

平安時代の戸隠史の文献

滝澤 貞夫

一

従来、戸隠の存在を示す最も古い確実な資料は、『梁塵秘抄』（治承四年、一一八〇ごろ成立）とされてきた。

四方の靈驗所は伊豆の走湯、信濃の戸隠、駿河の富士の山、伯耆の大山、丹後の成相とか、土佐の室生戸、讃岐の志度の道場とこそ聞け。

この歌謡は、当時既に戸隠が、全国的に名の通った霊場として整えられていたことを伺わせているのである。昭和四十六年八月刊行の『戸隠——総合学術調査報告』（信濃毎日新聞社戸隠総合学術調査実行委員会）の「歴史概説」（米山一政氏執筆）も、『拾遺往生伝』に言及はしているものの、後述のような事情から、結局は、この『梁塵秘抄』を最も古い文献としてあげている。『阿婆娑抄』には、平安末期に成立が遡り得る『戸隠寺縁起』が所収されているという。しかし前述の総合調査でも言われる通り、これは、鎌倉時代中期成立の同書に引かれている第二次的資料に過ぎず、しかも、仁明天皇の嘉祥二年（八四九年）ころ、学問長者が九頭竜神を岩戸に封

じ込めたとする縁起の内容は、多分に伝説的で、他にも同類の縁起が見られる点からみても、確実性は多分に疑わしい文献とせざるを得ないであろう。

一方、総合調査に報告されている通り、講堂址は、『顯光寺流記』に

承徳二年戊寅七月十二日戊午、本院講堂始建立

とある、承徳二年（一〇九八）建立を十分窺わせるものであり、十世紀以前では有り得ず、鎌倉時代以後に下降させる要のない遺構であることが明らかにされている。

堀河天皇の時代に、かなりの堂塔が建てていたとする戸隠での言い伝えは、この発掘調査により、事実として裏付けられたのであるが、戸隠が文献資料に登場するのはそれより八十年も後で、この期間は空白のまま、戸隠の歴史は、語られ、理解されてきたのである。

では、本当に現存最古の戸隠を記す文献は『梁塵秘抄』なのであるか。実は一見何の關係もないと思われる和歌関係の平安末期の資料の中に、戸隠が現れているのであり、これらの文献の存在により、郷土史家の『拾遺往生伝』の取り扱いに疑義が持たれるのである。小稿は、

京極興一信大名誓教授の御退官記念号にちなみ、教授の御出身地であり現在お住まいになっておられる戸隠の、最古の文献資料について整理を試みたものである。

二

『能因歌枕』（広本）の「国々の所々名」の信濃には、

さかさま川 きはふの里 ちくま河 さらしな あ
ふちの関 は、木々 をばすて山 まつかは うら
の里 きそのかけはし もち月 あさまのみたけ こ
まがたけ とがくし そのはら

と、戸隠の名が記されている。本書の成立年次は未詳だが、能因の晩年の著作らしく、彼の最終詠歌の永承五年（一〇五〇）前後に書かれたことは間違いないであろう。前述の『梁塵秘抄』より少なくとも百三十年は年代を遡るもので、これが私が調査した戸隠が記された現存最古の文献である。しかも、この文献の信憑性に関しては、昭和五十一年十一月刊の『しなの文学夜話』上（信濃毎日新聞社）と昭和六十一年四月刊の『名所歌枕蘇離飄の本文の研究』（笠間書院）で述べたことの繰り返しとなるが、能因が実際に信濃の地を訪れ、歌枕となり得る地を蒐集したものが書き留められていると解され、実地踏査の裏付けのあるものと思われる。

すなわち、寛仁四年（一〇二〇）頃、三河守として赴

任する友人源為善に随伴して能因は、御坂峠、帚木、園原を通過して、現在の国道一五三号線に随って三河国府へと向かった。この時の詠は、

為善朝臣、三河守にて下り侍りけるに、す
のまたというわたりにおりゐて、しなのの
みさかをみやりてよみ侍りける
しら雲の上よりみゆる足引の山のかねやみさかな
ららん

と、『後拾遺和歌集』朝旅、五一四番に収録されている。これまでは、ここにいう「すのまた」を、岐阜県の西南、長良川西岸にある墨股町を当てているが、同地から恵那山（標高二一九〇米）の背後に位置する御坂峠が見える筈はなく、「おりゐて」とある通り、峠から標高差八〇〇米下った阿智駅で、振り返り、仰ぎ見ての詠だったのではなからうか。問題の「すのまた」とは、川の合流点や道の分岐点を本来示す普通名詞であるから、現在の東山道と三州街道とが分岐した阿智川大橋の辺りを想定すれば、峠の眺望も可能であり全ての条件が叶うこととなる。

能因の二度目の信濃通過は、川村晃生氏が「能因の旅——陸奥下向前後——」（和歌文学研究三十五号、五十一年九月）で、初度陸奥下向野祭であったとする説に従いたい。能因が辿った順路は、前述の阿智駅から天竜川を遡り、杖突峠から諏訪へ出、山浦（現在の茅野市）か

ら雨境峠（立科町）を通過、春日（望月町）に下り、下
県（佐久市）辺りで千曲川を渡り、湯川沿いに長倉駅
（御代田、軽井沢）に出、入山峠を越えて上野国へと向
つたらしい。この旅の途上に、「まつかは」「駒ヶ岳」
「ちくま河」「もち月」「浅間のたけ」が存在している。
所在不明の「さかさま川」が天井川のことなら、諏訪湖
に注ぐ川が有名。「きはふの里」も、下伊那郡喬木村阿
島の犂牛原との説に従うのなら、「きそのかけ橋」は、
木曾谷の険阻な山道に補強されている棧道であろうから、
どこでもよく、二度目の信濃通過で、「さらじな」「お
ばすて」「うらの里」「とがくし」以外はすべて能因の
足跡の及んだ所ということになる。

能因の三度目の信濃通過は、長元元年（一〇三八）頃
の再度の陸奥下向の帰途であった。彼の家集でその巡路
を辿ると、東海道経由で、筑波から信夫の里、武隈の松、
末の松山、塩釜の浦、くり原の郡、音無の滝、昔川、八
十島、象潟と向かい、再び陸奥路を引き返し、武蔵、と
かは、綾の瀬からはこそ山（目崎徳衛氏は上野国碓氷郡
の山と推定しておられる。『平安文化史論』四十三年十
一月）、千曲川上流から東信濃、北信濃を通路し、荒川
沿いに下って日本海岸に出て、越前のたいふの山を通過
して帰京したらしい。この時、娵捨にやってきたことは、

九月十三夜の月を、ひとり望月詠之

さらしなやをばすて山に旅ねしてこよひの月をむか

し見し哉

と、後年伊予の地で一人月を觀賞しながら詠じた一首に
よって窺い知ることができよう。この巡路は、先の「さ
らしな」「をばすて」「うらの里」（上田市浦野）「と
がくし」のすべてを通過し得る道順となる。能因が記す
信濃の所の名は、単に机上で蒐集しようなものではなく、
彼の实地踏査によって書かれたものだと言えよう。これ
は信濃ばかりでなく、他の諸国についても同じであるこ
とを前掲拙著で考証したところである。そこで、ここに
記された「とがくし」も、必ずや能因が訪れ、確実に足
跡を留めた上でのことと解されよう。しかも「とがくし山」
でなく「とがくし」と記されているのであるから、能因
の訪れたのは堂塔であった筈である。

三

『能因歌枕』は、堀河天皇の時代かなりな堂塔が出来、
整えられていたとの地元の伝承を更に七十年程遡る資料
である。現在までの奥社の発掘調査の成果は、堀河天皇
の時代以後の年代のものであり、その点に「とがくし」
という地名一つを記すだけの『能因歌枕』の資料の弱点
を認めざるを得ない。ところが、この点を補強するに恰
好の資料が現存しているのである。康保四年（一一〇二）
から天永二年（一一一一）の間に成った三善為康の『拾

『遣往生伝』の下巻一七には、戸隠の持経者長明の火定のごとが書き記されている。永保年間（一〇八一〜一〇八三）の出来事で、著者と同時代に起きたことであり、これは事実とみて間違いないであろう。永保年間に、火定に入るほど真摯な修行僧がおり、それが為康の耳に入る程広く評判になつていたのであるから、この時代既にかの規模を誇る霊場になつてたことを示しているといえよう。この資料の存在からみて、更に五十年程遡る『能因歌枕』の「とがくし」は、決して唐突なものではなくなるからである。

戸隠の越水ヶ原には、「釈長明火定之所」の石碑が建ち、古い石塔が見られる。長明の火定は、戸隠で古くから伝承されてきて有名である。しかし従来は、この文献として鎌倉時代の貞応元年（一二三二）成立の『元享釈書』を採り上げてきた。『信濃史料』巻二の刊行時、『拾遺往生伝』はあまり知られていなかったため、止むを得なかった結果といえる。『元享釈書』は、広く僧侶に読まれた書物だったので、『天台懺標』『東国高僧伝』も同書から長明火定を書き写している。『信濃史料』は、丹念にこれらも収録している。問題は、この『元享釈書』は、明らかに『拾遺往生伝』の長明火定をそのまま書き写しており、永保年間を不用意に康保年間（九六四〜九六七）と誤写してしまつてゐる点である。そして郷土史家は十七世紀後半にあつたとするこの火定事件を、資料

的にあまりにかけ離れた昔の出来事なので、伝説の世界のごとと見なしてきてしまつた。火定事件は、第一資料である『拾遺往生伝』によって理解されるべきであり、紛れもなく、十一世紀末に起こつた歴史上の事件とすべきものだったのである。

四

能因が戸隠を訪れてから約三十年後、彼を敬慕していた受領歌人橘為仲（生年未詳・応徳二年・一〇八五）が、越後の国守在任中（延久元年・一〇六九〜一〇七三）に戸隠を訪れている。彼の家集乙本に、越後国府（当時は新井市か板倉村にあつた）から上水内郡小川の小川神社（式内社）へ参詣していることが知られるからである。乙本の一〇番歌に、

九月十三夜、小川の社に参りて、月い

と明かし

訪ふ人や夜ごろの月に待たれましわれひとりのみこ
しぢならずは

とあり、『橘為仲集全釈』の著者石井文夫氏も「『延喜式』巻第十神祇十神名下の『信濃国四八座』のところ、『水内郡九座 大一座小八座』として、『小川神社』の名があげられてある。現在の長野県上水内郡小川村にある小川神社であろう。越後の国の中に小川神社を見いだ

すことはできなかつた」とされるように、上水内郡の小川神社以外には該当する古社は見当たらない。そこで為仲は、越後国府から関川沿いに上り、更に鳥居川を遡って戸隠に達し、鬼無里經由で小川神社へやって来たのであろう。古道としては、この巡路以外はあり得ず、戸隠と小川の間には、白鬚神社や高山寺があり、川中島合戦の際は、戸隠寺や神社が小川へ疎開したことが物語るように関係が深く、いわば戸隠の奥の院のような存在であった。そこで、家集に直接戸隠の名は現れていないが、これも戸隠に密接な関係のある資料と見なせると思う。為仲の信濃歴訪は、能因の足跡を追い、その作品を体験しようとしてのものであった。家集乙本は、小川神社の詠に次いで、

十月つごもりごろに、雪降りたるに、
信濃の守たかもとがまうできて、遊び
しに、

思ひきや越路の雪を踏みわけて来ませる君に会わむ
ものとは

返し

今さらになと思ひし踏なれど君にあふちの関ぞう
れしき

都井といふ所に

都井と聞くに影だにゆかしきに水もつららになり
けるかな

園原を発ちて、御坂を過ぐとて

よそにのみ聞きし御坂は白雲の上までのぼる懸路な
りけり

娘捨山の月を見て

これやこの月見るたびに思ひいづる娘捨山のふもと
なるらむ

の信濃での詠が続く。「思ひきや」の源隆基の詠は、在原業平の「忘れては夢かと思ふ思ひきや雪踏み分けて君を見んとは」の名歌を踏まえ、信濃国府か、為仲の旅先きへ尋ねて来ての詠と解されよう。それに対する為仲の返歌は、信濃の地名「伊那」と「あふせの関」を詠み入れて、隆基の治める信濃を礼賛しつつ、京都を遠く離れた信濃での再会を、何よりも嬉しいと、率直に詠んだものと解される。為仲詠の「あふちの関」は、『能因歌枕』が取りあげている地名である。次の「都井」は、『大日本地名辞書』などに言う、諏訪大社の井戸と思われこれも能因が、かつて通過した地を訪れた際の詠と理解できよう。

ところで、国司は在任中も時々上落していた。例の

『源氏物語』で、伊予介が任期中に上落し、空蝉を伴って再び任国伊予へ下ったことは有名である。これは、架空の物語の世界だけでなく、『更級日記』の作者の父菅原孝標も、上総介在任中、しばしば上落して、京都で住む家を購入している。「よそにのみ」の詠は、為仲が信

濃へ出て、東山道を使っての上洛の際、信濃側の麓にある園原から、御坂峠を登って美濃へ向った際の詠だと思われる。更に注目すべきは、この詠が、能因の、「白雲の上より見ゆる足引の山の高根や御坂なるらん」を、十分意識し、詠歌視点を逆転したものと解される。そこで「よそにのみ聞きし」とは、能因の歌によって長年憧れていたことを意味していることになるであろう。これは、次の「これやこの」詠でも同様で、為仲は、姨捨の月への長年の憧憬によって、「これやこの」と感激、能因の後年「さらしなやをばすて山に旅ねしてこよひの月をむかし見し哉」と回想した如く、自分も「月見るたびに思ひ出づる」のだろうと詠じているのである。為仲の能因への心酔は、この二首からだけでも十分窺い知られるところであり、為仲の信濃遍歴が、これら能因の足跡を追ってのものであったことが知られるであろう。そこで、前述の長明の火定より十年程前に、一人の受領歌人が戸隠へやって来、更にその奥の院とも言うべき小川神社へ参詣した可能性は、ほぼ間違いないものと思われる。

五

為仲と同様の試みを、それも全国規模で敢行したのが西行である。西行の信濃の歴訪は、これまで川田順を始め、どちらかというとな否定的であった。しかし、現存す

る西行歌に詠まれている地名は、「雪山」「唐国」「壺碑」を除き、全て彼が実際に足跡を刻した可能性を持つものばかりである（拙稿「西行の歌枕」『論集西行』和歌文学会編・平成二年九月）。中でも信濃は、

あさま かざごしのみね きそのかけはし（4）

信濃 諏訪（2） ははきぎ 伏屋 おばすて（3）

と、他の諸国に比して少なくないのである。取り分け

「あさま」「きそのかけはし」「ははきぎ」「おばすて」は『能因歌枕』にあった地名である。西行は、このうち「きそのかけはし」と「をばすて」を後年、何度も釈教歌の中で取り上げ、己れの信仰の確認や深化の手立てとしている。その真摯な詠みぶりからみても、信濃を訪れたことは間違いないものと思われる。しかも、そこに詠まれた季節の違ひから少なくとも二度信濃へやって来たものと推定できる。

姨捨を訪れた西行の旅は、恐らく初度陸奥の旅の帰途だったと想像される。その巡路は、陸奥を含めて知られる限り、能因の場合と共通する地点が多い。そこで西行も、上野国から碓氷峠（当時は入山峠）を越え、千曲川に沿って下り、姨捨を訪れ、日本海に出て、北陸道を通じて京帰へ戻ったのであろう。

その場合注目されるのが、西行が新しく詠んだと思われる「越の中山」である。この山は、戸隠の北隣に聳え

立つ妙高山のことで、妙高山は二重式の火山で、最初基盤となるカルデラの広い火山があり、そのカルデラの中に、後に大きな高い火山が噴出して出来た山である。地元では、その特異な山容の特徴を捕えて、中山（新）と呼んだ。昭和二十年代まで、麓の村は名香山村といい、現在もその北隣に中郷村が存在している。中山は、好字を宛てて、名香山となり、いつしか音読みして、仏典に名高い妙高山と同じ発音から、更に好字を宛てて、現在では、妙高山に呼称は統一されている。

西行が、嫉捨からこの妙高山麓を通り、日本海へと抜ける場合、能因への思慕から、その足跡に共通点が多い以上、能因にならって西行も戸隠へやって来た可能性は極めて高いものと思われる。その場合、飯紐高原や日の御子社を伝説の場所として語られている西行伝説は全く無関係である。何故ならば、こうした西行伝説は全国各地に存在し、猿稚児の話は津市の南の雲出川に、ワラビの話も栃木県上都賀郡にそっくりそのまま伝承されていることが確認されているからである。

以上、戸隠の名を記す最古の文献は、『梁塵秘抄』であり、それ以後は、『吾妻鏡』に、戸隠山顕光寺の名が録されるのを始め、諸書にその名が現われるようになる。と理解されてきた戸隠の歴史であるが、このように平安末期の文献に戸隠は出てきており、『梁塵秘抄』で、全国屈指の一大霊場に発展するまでの過程を知ることがで

きることを明らかにした次第である。

(たきざわ さだお 信州大学教授)